

「西アジア考古学」の範囲は高等学校でどのように教えられるか —新しい学習指導要領と教科書より—

南澤 武蔵*

How Content Related to 'West Asian Archaeology' is Taught in High School: Perspectives on New Curriculum Guidelines and Textbooks

Musashi MINAMISAWA

キーワード：西アジア考古学、高校歴史教育、歴史総合、世界史探究

Keywords: West Asian Archaeology, Education of History in High School, Modern and Contemporary History, Advanced World History

1. はじめに

2022年度より高等学校の教育課程は、年次進行で新しい学習指導要領（現行）へと置換が始まっており、2024年度には新課程への移行が完了する。平成30（2018）年に告示された今回の学習指導要領の改訂は教育の在り方を大きく変えると言われることも多い。高等学校の歴史教育も無関係ではなく、むしろ科目の大きな改変があったため、今回の改訂によって大きく変わると喧伝されている。

この新課程は西アジア考古学には影響はあるのだろうか。無関係とは言えない。そこで、「西アジア考古学」と関連する内容を「西アジア考古学の範囲」とし、高等学校の歴史教育でその範囲がどのように教えられることになるのか、本稿ではその見通しを述べていく。その際には学習指導要領に加え、全種発行された新課程の教科書も参照する¹⁾。そして、本稿で以下のように定める「西アジア考古学の範囲」が高校歴史教育においてどのような扱いと内容になるのかを確認していく。

第30回西アジア発掘調査報告会の報告集の巻頭で、三宅裕会長がこれまでの報告会における国別の報告件数を10年ごとでまとめて示している（三宅2023）。それによると、地域的には西はブルガリアから東はパキスタンまで、南はエジプトから北はキルギスに広がっており、同報告集の日本隊が発掘調査をした遺跡地図も同様の範囲を示している（日本西アジア考古学会2023: 8）。当該地域を「西アジア考古学の範囲」としたとき、高校生は旧課程であれば世界史B、新課程であれば世界史探究において「人類の誕生」や「文明の成立」なども含めた世界の歴史を網羅的に学習する一環でこの範囲にふれる。時間軸の設定は難しいが、高校の学習指導要領や教科書に合わせて考え、大項目「A 世界史へのまなざし」の「(1) 地球環境

から見る人類の歴史」と大項目「B 諸地域の歴史的特質の形成」で扱う内容を対象とする。この範囲には人類の誕生から7～8世紀ぐらいまでの時代が入る²⁾。なお、本稿が日本西アジア考古学会の学会誌上であることから、本学会で扱われる範囲を前提としてタイトルにも「西アジア考古学」を掲げているが、紙幅の都合もあり、内容的には「先史・古代の西アジア・北アフリカ史」が中心となる点はご容赦願いたい。

2. 学習指導要領の改訂と地理歴史科の科目編成

学習指導要領は文部科学省が定めている教育課程（カリキュラム）の基準であり、学校における科目編成や単位数に関係している。そのため、日々の授業の時間割から使用する教科書の内容、そして大学入試の科目と内容までが学習指導要領に基づき、その改訂によって変更される。学習指導要領は約10年ごとに改訂され、現行の高等学校学習指導要領は平成30（2018）年に告示された（文部科学省2018a, 2018b）。2023年度は現行の学習指導要領が施行されて2年目となっている。

現行の学習指導要領には改訂のポイントがいくつかある。一つは「コンテンツからコンピテンシー」へと表現される「資質・能力の育成」が明確に打ち出された点である。従来から「何ができるようになるか」は学習指導要領の中に盛り込まれていたが、育成を目指す資質・能力が明確化され、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された。これにともなって、すべての教科の目標及び内容もこの三つの柱に基づいて再整理された。

二つ目は地理歴史科における科目の新設・再編である。今回の高等学校学習指導要領においては1960年の学習指導要領改訂で設置されて半世紀以上続いた

*東京大学教育学部附属中等教育学校／東京大学芸術創造連携機構

Secondary School attached to the Faculty of Education, the University of Tokyo/Art Center, the University of Tokyo
西アジア考古学 第25号 2024年 103-112頁 ©日本西アジア考古学会

表1 歴史総合の目標（文部科学省 2018a: 56）

- 社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- (1) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界と其中的の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
 - (2) 近現代の歴史の変化に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
 - (3) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

「世界史 A」「世界史 B」が、世界史 A は廃止されて「歴史総合」の新設、世界史 B は「世界史探究」への改変によって新たな科目となった。この改訂により、従前は必履修科目であった世界史 A（2 単位）または世界史 B（4 単位）、4 科目から 1 科目を選択履修する地理 A（2 単位）・日本史 A（2 単位）・地理 B（4 単位）・日本史 B（4 単位）の科目編成が、2 単位の歴史総合と地理総合が必履修科目となり、3 単位の地理探究・日本史探究・世界史探究の履修は選択とされた。

3. 歴史総合

(1) 学習指導要領における記載

歴史総合の目標は学習指導要領において表 1 のように示されている。歴史総合は世界史と日本史の近現代史を有機的に結びつけて総合的に学ぶ科目として位置づけられ、歴史の見方・考え方を学ぶ科目である。近現代の歴史を通して学ぶ科目であるため、科目の目標には近現代史の学習を通じた目標が掲げられている。また、学習指導要領の「目標」以下の「内容」においても学ぶ事項は近現代と明確に定められている。

この「内容」は改訂以前の学習指導要領における世界史 A とは明確に異なる。世界史 A では近現代を中心に学ぶことにはなっていたが、その「内容」の構成には近代以前も含まれていた（文部科学省 2009a, 2009b）³⁾。近代以前を「扱わない」としたことは今回の改訂における内容面での大きな変更であり、日本学術会議の提言の中でも近代以前の扱いについては議論されてきたが、学習指導要領の内容構成から外される結果となった⁴⁾。世界史と日本史の近現代の部分有機的に学ばせることや、生徒が生きる今日の世界につながる歴史を学ぶ機会となる科目の意義は、高校の授業を担当する教員として理解できる一方、古代オリエ

ント世界の研究に携わってきた者としては近代以前が扱われなくなること寂しさを感じる。この内容面における変化は、昨年度から実際に授業で使用されている教科書にどのような影響を与えたのか。次に教科書の内容を検討する。

(2) 教科書の記載

教科書の内容は学習指導要領における「内容」や「内容の扱い」に即した形となり、文部科学省の検定を経て発行される。そのため、学習指導要領の変更は教科書の内容に直結する。新科目となった歴史総合は、改訂前の世界史 A とは内容が大きく異なるものとなった（表 2）。世界史 A の教科書は序章の「人類の誕生」「農耕・牧畜の開始」に続き、第 1 章で「諸地域世界の特質」の中で「西アジア考古学の範囲」に関係する部分がある。具体的には「南アジアの風土と人々」「古代インド文明」「西アジアの風土と人々」「古代オリエント文明」「ヨーロッパの風土と人々」「古代のギリシア世界」「古代のローマ世界」「キリスト教とローマ帝国の解体」「草原とオアシスの民」である。しかし、歴史総合にはこうした「西アジア考古学の範囲」に関連する項目が章や節として盛り込まれている教科書はない。「西アジア考古学の範囲」に関連する内容は本編前の「巻頭資料」として、近代以前の歴史が地域ごとに見開き 2～3 ページにまとめられた中の一部となっている。そのため、基本的には学習指導要領の通り「扱わない」形である。これは科目の設定上、当然の結果ではあるが、歴史総合が誕生したことで、高校生が西アジアでの農耕・牧畜の開始や古代の諸王朝や多様な文化を必修科目の教科書で目にする機会は失われた。

表2 世界史 A (旧課程) と歴史総合の目次の比較

世界史 A	歴史総合
山川出版社『現代の世界史』(世 A 315、近藤ほか 2021)	山川出版社『歴史総合 近代から現代へ』(歴総707、岸本・鈴木編 2023)
世界史へのいざない① 日本列島のなかの世界の歴史—言語・文字と歴史	巻頭資料 諸地域世界の形成
世界史へのいざない② 地理的環境と歴史・文化—沖縄と海	歴史の扉① 歴史と私たち 日本と洋菓子
序章 人類の歴史の始まり	歴史の扉② 歴史の特質と資料 台湾における砂糖の生産
人類の誕生／農耕・牧畜の開始	第1部 近代化と私たち
第1部 一体化する世界	近代化への問い
第1章 諸地域世界の特質	1 交通と貿易／2 産業と人口／
①東アジア世界	3 権利意識と政治参加や国民の義務／4 学校教育／
東アジアの風土と人々／中国文明の特質／	5 労働と家族／6 移民
東アジア世界の形成と日本	第1章 結びつく世界
②南アジア・東南アジア世界	1 アジア諸地域の繁栄と日本
南アジアの風土と人々／古代インド文明／東南アジア文明の形成	2 ヨーロッパにおける主権国家体制の形成とヨーロッパ人の海外進出
③西アジア世界	第2章 近代ヨーロッパ・アメリカ世界の成立
西アジアの風土と人々／古代オリエント文明／	1 ヨーロッパ経済の動向と産業革命
イスラーム世界の形成／イスラーム文明の特徴／	2 アメリカ独立革命とフランス革命
イスラーム世界の拡大	3 19世紀前半のヨーロッパ
④ヨーロッパ世界	4 19世紀後半のヨーロッパ
ヨーロッパの風土と人々／古代のギリシア世界／	5 19世紀のアメリカ大陸
古代のローマ世界／キリスト教とローマ帝国の解体／	6 西アジアの変容と南アジア・東南アジアの植民地化
中世の西欧／キリスト教会／国王と都市／ビザンツとロシア	7 中国の開港と日本の開国
⑤陸と海の交流	
草原とオアシスの民／東アジアの海上交流／	
ムスリム商人とインド洋交易／西アジアと地中海交易圏	
現在へつながる歴史1 イスラーム社会と水	
□イスラームの女子教育	

4. 西アジア考古学における現在の課題と中等教育

三宅裕会長が『第30回西アジア発掘調査報告集』の巻頭「開催にあたって」において、次の事を指摘している(三宅 2023: 3)。

…その一方で思いもよらぬ問題も出てきています。少なからぬ数の調査団が人手不足に悩んでいるのです。これは調査の遂行に支障が出かねないばかりか、学会の将来にとっても由々しき事態となりかねません。発掘調査は若手研究者を育成するまたとない機会ですが、調査の実施と後進育成のサイクルを確立させていけるよう、学会としても積極的に取り組んでいきたいと考えています。

この指摘には新たに西アジア考古学の研究を志し、今後の研究を担う若手の減少に対する危機感が示されている。学生が西アジア考古学の分野に入ってくる契機は様々だろう。高校時代の世界史の授業を契機に西アジア考古学の世界に進んだ学生が多いとは思わない。しかし、それでも高校の教科書への掲載は、例えば高校生が古代オリエント世界を目にする機会にはなっていた。それが今回の改訂によって、すべての高校生が手にする歴史総合の教科書からは近代以前の内容の扱いがなくなったのである。地域ごとにまとめたページにおいて個々の文明や文化、国や王朝の記載は基本的にされず、西アジアであれば僅かにピラミッド

などの建造物の写真や挿絵が載る程度である。

また、高校以前に西アジア考古学と関係する内容を学ぶ機会があるかと言えば、それも極めて限定的である。中学校で学ぶ「西アジア考古学の範囲」の内容は南アジアを含めても限られたものである。イランや東地中海沿岸などが出てくることはなく、「人類の誕生」「メソポタミア文明」「エジプト文明」「インダス文明」のみである。その中で扱われている内容や使われる語句も「西アジア考古学の範囲」を学ぶため、興味・関心をもつために十分とは言えない。表3は、例として中学の教科書に盛り込まれているメソポタミアとエジプトの両文明に関連した語句を示したものである。

ここまでを整理すると、①西アジア考古学の調査研究においては人材不足の状況がある。②学習指導要領の改訂によって、「西アジア考古学の範囲」を扱った章や節が記載された教科書をすべての高校生が手にすることはなくなった。③中学校において学習する「西アジア考古学の範囲」の内容は極めて少ない。③の現状があるため、②の結果として①に負の影響が出ること懸念する。

その一方で、現在は博物館や書籍はもちろんのこと、インターネットの利用によって西アジア考古学の情報へのアクセスは容易になっている。そのため、学校の授業が興味・関心を抱く機会となる割合は相対的

表3 中学生が学習する語句例：古代オリエント

山川出版社『中学歴史 日本と世界』（歴史708、橋場・桜井編 2022）	
メソポタミア	エジプト
ティグリス・ユーフラテス川 都市国家 メソポタミア文明 神殿 楔形文字 粘土板 六十進法 太陰暦 1週7日制 ハンムラビ王 ハンムラビ法典	「エジプトはナイルのたまもの」 ヘロドトス ナイル川 エジプト文明 ファラオ ピラミッド スフィンクス 神聖文字（ヒエログリフ） 太陽暦 ロゼッタ＝ストーン シャンボリオン バビルス

に小さくなっていると推測する。改訂前の世界史 A が近現代史中心の内容構成であったことを考えると、教科書の記載の有無はそれほど影響しない可能性もある。また、高校で「西アジア考古学の範囲」の内容を実際に学ぶ機会は選択科目の世界史探究（旧課程の世界史 B）の授業においてである。これまでも全員が世界史 B を選択していたわけではないことを考えれば、今回の改訂が上記の①に与える影響は限定的とする見方もできる。ただし、この見方が成立するための条件は世界史探究の選択者数が維持され、世界史探究が内容面で世界史 B と大差がないことである。

2024 年度入試が最後となる旧課程の地理歴史科目の選択者数を 2023 年度の大学入試センターが発表している共通テストの受験者数で見ると、日本史 B：137,071 人、地理 B：139,012 人、世界史 B：78,185 人となっており、実際の授業履修者数の関係と必ずしも一致するわけではないが、世界史選択者は日本史選択者の 6 割に満たない。今後は受験人口の減少が進むため、受験人数も減少することが予測される⁵⁾。さらに、必修であった世界史 A が歴史総合になった影響は、世界史選択者の減少につながる可能性も指摘されている（矢部 2018: 237; 吉嶺 2019: 68）。歴史総合に日本史・世界史の内容がともに入ってくるとき、高校 1 年生の必修科目として世界史 A を学んでいた旧課程と比べ、受験を考えた際には小・中・高と学んできた日本史を選択した方が、一から学ぶことが多い世界史よりも学びやすいと生徒が判断するだろうという見方である。入試科目の設定において「歴史総合・世界史探究」とする科目の組み方が高校生の科目選択にどのような影響を与えるかは 2025 年度以降の入試を待つことになるが、先に条件として挙げた「世界史探究の選択者数が維持され」ことは難しいかもしれない。

5. 世界史探究

(1) 学習指導要領における記載

世界史探究は必修修科目である「歴史総合」の学習によって身に付けた資質・能力を基に、世界の歴史の

大きな枠組みとその展開に関わる諸事象について学び、歴史的経緯を踏まえて今日の世界の課題を探究していく科目である。科目の目標は表 4 の通り、世界の歴史を広く扱いながら、調べたりまとめたりする技能や、多面的・多角的に考察する力、表現力等を養うこととされている。歴史総合とは異なり、扱う内容には人類の誕生や各地域における古代社会の形成も含まれている。ここで問題となるのは、内容の扱いが改訂前の世界史 B と世界史探究で大差がないかという点である。世界史 B は 4 単位、世界史探究は 3 単位の科目として設定されている。

今回の学習指導要領の改訂に際しては高校歴史教育における「用語問題」も大きく取り上げられた。世界史用語の問題は小川幸司の著名な論考「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」において、少しでも多くの知識を生徒に伝えようとする教員と増えすぎた用語の暗記に苦しむ生徒の在り様が指摘されてきた（小川 2009）。改訂においては用語を減らす必要性が強く主張され、高大連携歴史教育研究会内の用語の精選を進める部会において検討が重ねられている⁶⁾。用語の精選の方針としては、具体的な人名、地名、出来事名などの語句は極力減らし、概念用語を中心に据える考えが示されている（高大連携歴史教育研究会 2017: 4, 5）。精選の具体例として表 5 のようにオリエントのシュメール、アッカドおよび古代エジプトの用語を比較すると、世界史 B の用語との差は歴然である。これぐらい用語を絞っていかないと、用語を羅列していくだけで授業時間が終わってしまい、生徒は講義形式の授業で与えられた情報を暗記することに終始する学習になってしまう。そうした学習に歴史を学ぶ面白さを感じにくい実態は確かにあり、一教員として考えた時にも「西アジア考古学の範囲」の面白さが生徒に伝わるとは思わない。

(2) 教科書における扱い

それでは、実際に世界史探究になって教科書の内容や用語はどうなったのか。序章の「人類の誕生」を含め、大項目 B「諸地域の歴史的特質の形成」に該当す

表4 世界史探究の目標（文部科学省 2018a: 69, 70）

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。 (2) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。 (3) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。
--

表5 世界史B（旧課程）と高大連携歴史教育研究会の用語一次案の比較

	世界史Bの用語：『世界史用語集 改訂版』（全国歴史教育研究協議会編 2018）	高大連携歴史教育研究会の用語第一次案（高大連携歴史教育研究会 2017: 10, 11）
メソポタミア	ティグリス・ユーフラテス川 神権政治 ウル ウルク ラガシュ シュメール人 都市国家 ジググラト アッカド人 サルゴン アムル人 バビロン バビロン第1王朝 ハンムラビ王 ハンムラビ法典 「目には目を、歯には歯を」 復讐法 楔形文字 六十進法 太陰暦 1週7日制	メソポタミア ティグリス・ユーフラテス川 神権政治 シュメール人 都市国家 バビロン ハンムラビ法典 「目には目を、歯には歯を」 楔形文字 六十進法 太陰暦 1週7日制 太陰太陽暦
エジプト	「エジプトはナイルのたまもの」 ヘロドトス ナイル川 ノモス ファラオ 古王国 中王国 新王国 メンフィス クフ王 ギザ ピラミッド スフィンクス 上エジプト テーベ ヒクソス アメンホテプ4世 テル＝エル＝アマルナ アトン アマルナ美術 エジプト人 ラー アモン＝ラー ミイラ 死者の書 オシリス 神聖文字 民用文字 測地術 パピルス 太陽暦 ロゼッタ＝ストーン シャンボリアン	エジプト ナイル川 ファラオ ピラミッド ラー ミイラ 死者の書 神聖文字 パピルス 太陽暦 ロゼッタ＝ストーン

る部分が「西アジア考古学の範囲」に関連する章や節となる。各社が出版した世界史探究の教科書の目次をイスラーム以前までの「西アジア考古学の範囲」の項目で比較すると表6のようになる。どの教科書会社のものも、人類の誕生からの農耕・牧畜の開始、メソポタミアにおいてはシュメールの都市国家に始まり、エジプトは文明の成立から新王国時代、東地中海における諸民族の活動、アッシリアによるオリエントの統一とアケメネス朝ペルシアの支配、そして南アジアや中央ユーラシアにおける国家形成などが扱われている。また、例として『新詳世界史探究』（帝国書院）と『詳説世界史 世界史探究』（山川出版社）の古代エジプトの記述をみると、世界史Bの教科書に掲載されていた

語句が基本的には継続して使用されている（表7）。しかし、既に現在の教科書は語句が多すぎるとする指摘もあるため（井野瀬ほか 2023: 14, 15）、従来通りで問題がないと言うことはできない。

用語の問題は、減らさないと生徒が多彩な資料を扱いながら自ら歴史を考えることができないとする問題意識に立脚している。世界史探究の教科書では、今回出版されたものに世界史Bの教科書からの記述内容の大幅な変更は認められなかった。しかし、内容の変更がないことを受けて現状を維持するのではなく、世界史探究の目標や科目の性格に合わせた形で生徒が授業で扱う資料となるような情報を関係する学会などが積極的に出していくことも考えられるのではないかな。

表6 世界史探究の教科書の目次構成の比較（イスラーム以前）

教科書	編／部	章	節
東京書籍 世界史探究 世探701 (福井ほか編 2023)	第1編 諸地域の歴史的 的特質	序章 世界史へのまなざし 第1章 古代文明の出現 第2章 西アジアと地中海周辺 第5章 東アジアと中央ユーラ シア	2 地球と人類の誕生 1 農業と気候 2 古代オリエントとエーゲ海地域 3 南アジアの古代文明 1 古代オリエントの統一 2 古代ギリシアとヘレニズム世界 3 ローマ帝国と地中海世界 4 古代末期の社会と地中海世界の解体 5 地中海世界とアジア 1 古代帝国の誕生
実教出版 世界史探究 世探702 (木畑ほか編著 2023)	第1部 諸地域の歴史的 的特質の形成	世界史へのまなざし 第1章 古代文明 第2章 東アジアと中央ユーラ シア 第4章 西アジアと地中海周辺	1. 地球の誕生と生命の進化 1. 農耕と牧畜のはじまり 2. オリент文明 3. インダス文明 3. 中央ユーラシアの国家形成 1 オリентの統一 2 ギリシア文明 3 ヘレニズム時代 4 ローマ帝国 5 西アジアの国々と諸宗教
帝国書院 新詳世界史探究 世探703 (桃木ほか 2023)	1部 世界史へのまな ざし 2部 諸地域の歴史的 特質の形成	1章 地球環境からみる人類の 歴史 序章 古代文明の歴史的特質 1章 東アジアと中央ユーラシ アの歴史的特質 2章 南アジアと東南アジアの 歴史的特質 3章 西アジアと地中海周辺の 歴史的特質	3節 中央ユーラシアと遊牧国家 4節 遊牧帝国の興亡と移動 1節 南アジアの文明と国家形成 1節 オリент文明の興亡 2節 地中海周辺の国家形成 3節 地中海周辺と西アジアの帝国
山川出版社 詳説世界史 世探704 (木村ほか編 2023)	世界史へのまなざし 第Ⅰ部 諸地域の歴史的 特質の形成	①地球環境からみる人類の歴史 第1章 文明の成立と古代文明 の特質 第2章 中央ユーラシアと東ア ジア世界 第4章 西アジアと地中海周辺 の国家形成	自然環境と人類の深化 1 文明の誕生 2 古代オリエント文明とその周辺 3 南アジアの古代文明 1 中央ユーラシア——草原とオアシス の世界 1 イラン諸国家の興亡とイラン文明 2 ギリシア人の都市国家 3 ローマの地中海支配 4 キリスト教の成立と発展
第一学習者 世界史探究 世探707 (秋田ほか 2023)	第1編 世界史へのま なざし 第2編 諸地域の歴史的 特質の形成	第2章 古代文明の歴史的特質 第3章 諸地域の歴史的特質	地球環境から見る人類の歴史 1 西アジア文明 2 インダス文明 1 西アジアと地中海周辺の諸国家 ①古代ギリシア ②西アジア文明の拡大 ③ローマ帝国 ④キリスト教 4 秦・漢と遊牧国家 ①遊牧国家と秦漢帝国

表7 世界史探究の教科書記述2例：古代エジプト

教科書	記述内容
帝国書院 新詳世界史探究 (桃木ほか 2023: 58, 59)	ナイル川の流域は河口部のデルタ地帯を除けば全体として大きな谷を形成している。毎年起こる反乱は肥沃な土壌をもたらし、時期・水量共にほぼ規則的で、人々は1年を365日とする太陽暦に基づいて正確にそれを予測することができた。ギリシアの歴史家ヘロドトスは「エジプトはナイルの賜物」と評している。エジプトでは、ナイル川流域の各地方で集落ごとに灌漑農業が発達していたが、大規模な治水・灌漑事業の必要から、前3000ごろに統一国家が成立した。 エジプトの王（ファラオ）は、太陽神ラーの子として超越した権力をもち、読み書き能力のある神官や書記を官僚として神権政治を行った。象形文字である神聖文字（ヒエログリフ）が発明され神殿や墓に刻まれるとともに、より簡略化された民衆文字がパピルス（一種の紙）に記された。 また、エジプト人は靈魂不滅を信じて遺体をミイラにして保存し、パピルスに記された「死者の書」と共に埋葬された。 古代エジプト史は、大きく古王国・中王国・新王国の三つの時代に区分される。古王国はメンフィスを都とし、クフ王の時代を中心に巨大なピラミッドが建造され、天体観測・土木・測地などの技術が発達した。エジプトでは十進法が用いられたが、ゼロの概念は知られていなかった。天体観測や暦や、測地術は後のギリシア人やローマ人にも影響を与えた。その後、ナイル川下流域の開発を進めた中王国が衰退すると、シリアから移住し、馬と戦車（戦闘用二輪車）で武装したヒクソスがデルタ地帯に王朝を建てた。 ヒクソスを撃退した新王国は、ナイル川上流域やアジア方面に活発な軍事遠征を行って支配領域を広げた。前14世紀にはテーベの守護神と結びついたアメン＝ラーをまつる神官団と対立したアメンヘテプ4世（後にアクエンアテンと改名）が、太陽そのものを唯一神アテンとし、従来の多神教を否定する宗教改革を行った。都はテーベからアマルナに写し、写実的なアマルナ美術を生み出したが、王の死で改革は挫折した。その後もシリア北部でヒッタイトと戦うなど新王国の隆盛は続いたが、前7世紀以降、たびたび異民族の支配を受けるようになった。
山川出版社 詳説世界史 (木村ほか編 2023: 23, 24)	「エジプトはナイルのたまもの」という言葉通り、エジプトではナイル川の増減水を利用して豊かな農業がおこなわれた。また、ナイル川の治水には、住民の共同労働と、彼らを統率する強力な指導体制が必要であったため、全国を統一的に支配する仕組みが早くから発達した。 前3000年頃、エジプトではメンポタミアより早く、王（ファラオ）による統一国家がつくられた。以後、一時的に周辺民族の侵入や支配を受けながらも、国内統一を保つ時代が長く続いた。この間に約30の王朝が交替したが、そのなかでも古王国・中王国・新王国の3時代に繁栄した。 エジプトの王は行ける神であり、神官や役人を使って専制的な神権政治をおこなった。ナイル川下流域のメンフィスを中心に栄えた古王国では、クフ王らがおそらく自分の墓として、巨大なピラミッドを築かせた。これは神である王の絶大な権力を示している。中王国時代には、中心は上エジプトのテーベに移ったが、その末期にシリア方面から遊牧民のヒクソスが流入し、国内は一時混乱した。しかし、前16世紀にヒクソスを撃退して新王国時代が成立して新王国時代が成立し、さらにシリアへと進出した。前14世紀にはアメンヘテプ4世（アクエンアテン）が中部エジプトのテル＝エル＝アマルナに都を定め、従来の神々の崇拝を禁じて一つの神（アテン）だけを信仰する改革をおこなった。この改革は王の死で終わったが、信仰改革の影響で古い伝統にとらわれない写実的なアマルナ美術が生み出された。 エジプト人の宗教は太陽神ラーを中心とする多神教で、新王国時代には首都テーベの守護神アメンの信仰と結びついたアメン＝ラーの信仰が盛んになった。エジプト人は靈魂の不滅を信じてミイラをつくり、「死者の書」を残した。エジプト文字には、碑文や墓室・石棺などに刻まれた象形文字の神聖文字（ヒエログリフ）と、パピルス草からつくった一種の紙（パピルス）に書かれた民用文字（デモティック）とがあった。また、エジプトで発達した測地術はギリシアの幾何学の基になり、太陰暦はとらんで用いた太陽暦は、のちにローマで採用されてユリウス暦となった。

学習指導要領の「内容の取扱い」においては、文化遺産の活用や専門家との連携が記載されている⁷⁾。日本西アジア考古学会として、本会は世界史探究において役割を担う部分があると筆者は考えている。教科書に直接的な記載がされている如何ではなく、「西アジア考古学の範囲」に関連する学習が充実するように、生徒が自分たちで扱いながら多面的・多角的に考察ができるような資料を提供できるのではないか。また、今後の学習がいわゆる語句の暗記ではなく、概念用語などの活用となっていく時、西アジア考古学は長く「農耕」「王権」「祭祀」「都市」のような概念用語に関

わる研究を積み重ねてきている。むしろ、人類の誕生から古代文明の範囲においては大いにその研究成果が求められると予測している。高校生の学びに合うような形で研究成果が資料化されて教材となっていけば、「西アジア考古学の範囲」の学習における生徒の興味・関心も高まっていくと考える。

6. 「西アジア考古学」に今後求められること

(1) 高校教員の取り組みとして

学習指導要領の改訂によって、今後の高校世界史教

育は知識を詰め込むこと、生徒が語句を覚えること（暗記すること）ではなく、さまざまな資料を活用しながら、生徒が歴史事象について多面的・多角的に考察できるようにすることが求められている。今回の改訂では「何ができるようになるか」が重要であり、資質・能力の三つの柱の育成が掲げられている。この資質・能力を育成するため、歴史総合の授業と世界史探究の授業は共に資料を扱いながら問いに対して生徒が思考する構成となっている⁸⁾。そのため、高校教員にはどのような教材を用意し、生徒がどのような問いを立て、どのような形で資料を扱っていくのかを考えた授業デザインが求められている。

筆者個人としては旧課程においても西アジア考古学と関連した資料を積極的に用いた授業実践に取り組んできた。ファイアンスの製作体験を一つの資料として生徒が古代エジプト社会について考える授業（南澤 2016）や、地中海や紅海による他地域との結びつきに着目して「海洋国家としての古代エジプト」について自分たちで考えて発表する授業（南澤 2019）、私自身がエジプトで採録した写真も含め、生徒が様々な資料を使いながらナイルの西方デルタに位置するコム・アル＝ディバーウ（Kom al-Diba'）遺跡の往時の姿を考察して発表する授業（南澤 2020）などの実践である⁹⁾。こうした授業においては、どのような資料を準備できるかが授業構成や計画を考える際の大きな要素となった。

既に本学会の会員諸氏は「西アジア考古学の範囲」の専門書、一般向けの書籍を多く執筆されている。そうした書籍などを生徒に適した形で授業に活用していくのは高校教員側が教材研究の中で取り組むべきことである。一方で、教材に使う資料をどのように見つけるか、どのように出会うかを考えるとき、人類の誕生から現代の世界までを扱う高校世界史の教員がすべての分野に精通し、網羅的に資料を把握することは一朝一夕にはできない。自分が専門的に学んだ時代や地域をもつ教員だけではなく、教員養成系の大学出身の教員は教育学や教授法が専門である場合もあり、扱う内容や分野に関する専門がない者もいる。教科書に出てくる語句を知識として教える授業からの転換期に際し、高校教員はまさに授業で使用する資料を探し、教材を開発している¹⁰⁾。新たな教材の開発において「西アジア考古学の範囲」の授業をいかに生徒にとって魅力あるものにしていくか、現場の教員が教材研究を深めて授業をデザインしていくことが必要である。

(2) 研究者や研究機関等の取り組みとして

現在の高校歴史教育の変化を受けて積極的に情報発信をしている学会もある。東南アジア学会は歴史総合のための「東南アジア関連索引語参考文献 202303_人

物」「東南アジア関連索引語参考文献 202303_事項」として、歴史総合の教科書 12 冊に記載されている東南アジアに関する語句の参考文献を集成して学会から発信している（東南アジア学会 2023a, 2023b）¹¹⁾。こうした情報提供の姿勢は本学会にも今後は求められることかもしれない。むしろ、世界史探究においては用語に西アジア考古学が強みとする部分があり、積極的に担うべきところである。

現状としては、教育関係者を意識して書かれた書籍や教科書会社が発行する冊子等に寄せられた論考は教員も目にする機会があり、授業で生徒に提供しやすい資料となっていることも多い¹²⁾。しかし、学会誌や専門的な書籍に掲載されている論考などは専門外の教員にはアクセスが容易ではなく、また実際の授業資料としていくことも難しい。歴史総合の授業を念頭ににした資料を選択する観点としては、①生徒の生活（実感）とのつながり、子どもや学校などの要素、②共感的な要素、③ドラマ性や謎解き（臨場感、ワクワク感）、④ニュース性・現在進行中のもの、⑤対立軸や論争性などの五つが挙げられている（米山 2022: 84）。①～⑤の観点は世界史探究の授業資料の選択にも有効な観点である。この点もふまえて私見を加えると、これからの世界史探究などの授業で使用しやすい資料のイメージは、専門的でありつつ、複数の見方・考え方を可能とする遺物・遺構、出土状況等を示す視覚的な資料や文字資料であり、日本語での解説も添えられているものである。そうした資料が研究者側から様々な形で提供されると、教員が生徒に読ませ、考えさせる授業教材としての利用も進むと考える。

教科書の記述に関して、長谷川修一会員が執筆者の責務として「史実」を書くことや史実性への疑義の明記、どのような史料に基づく歴史記述かを示す必要性を指摘している（長谷川 2018: 18）。同時に高校教員にも史料自体を生徒に読ませて史実性について考えさせること、教員が最新の情報にアクセスして授業に反映させること、歴史教科書の記述が「過去に起きたこと」としての「史実」だけを書いているわけではないことを明確に伝える必要性を指摘している（長谷川 2018: 19）。教科書に反映させられることには限度があるため、この二つの指摘をふまえて考えても、教科書の記述を生徒が「知識」として鵜呑みにするような授業にしてはいけな。むしろ、教科書の記述の基になった史料、史実性を疑う根拠となるような考え方などを資料として生徒に示し、生徒が「史実」を考えていく授業展開が望ましい。その際に使用する史料／資料が研究者の側から利用しやすい形で示されることを高校教員側は望んでいる。

また、今回の学習指導要領においては生徒が「問い」を立て、見通しをもって単元の学習を進めること

が求められている。しかし、生徒が「問い」を立てることは難しく、適切な資料選びや支援の在り方には頭を悩ます。生徒が多面的・多角的に考えられ、「問い」に結びつけられそうな資料やアプローチを探す日々である。一般書などにおいて、調査に関連した資料とともに、教科書の内容や記述との関連や異なる見方・考え方が指摘されているだけでも高校教員の教材研究に新たな視点を提供する。

7. おわりに

3章で、歴史総合に「西アジア考古学の範囲」の扱いがないことを確認した。しかし、本学会員が調査地からもたらす現地の情報は、歴史総合の資料として大いに価値があると筆者は考えている。本学会の関係者には紛争や治安等の関係で学術調査や文化財関係の業務以外では入ることが難しい場所で調査等を展開している方も多くいる。実際に現地に赴き、現地の人と関わり、その地域の現状を文章や視覚資料として伝えることができる研究者は限られるだろう。そうした本学会の研究者が知る現地での見聞は、近現代史を通して生徒が生きる現代社会について考察しようとする歴史総合の授業において貴重な資料となる。調査や研究成果の発表が本筋であることは重々に承知した上ではあるが、本学会員からの資料の提供は高校歴史教育における生徒の多面的・多角的な考察を促すものになるとことは間違いない。転換期の今、中等教育、とくに高校での歴史教育への情報提供が「西アジア考古学」に求められている。

註

- 1) 本稿は2023年6月24日・25日に開催された日本西アジア考古学会第28回大会(白鷺大学)における同タイトルによる口頭発表に加筆し、再構成したものである。
- 2) 「ギリシア・ローマ」についてはより専門とする日本西洋古典学会などはあるが、「西アジア考古学」の調査においても遺跡や遺物が扱われるため、時代として範囲に含めて考える。また、学習指導要領上の大項目「C 諸地域の交流・再編」で扱うことになっているアフリカ・アジアへのイスラームの伝播の時期なども実際の調査においては関係してくる。
- 3) 旧課程の学習指導要領(2009年告示)下の世界史Aの内容には「(2) 世界の一体化と日本」の「ア ユーラシアの諸文明」に「自然環境, 生活, 宗教などに着目させながら, 東アジア, 南アジア, 西アジア, ヨーロッパに形成された諸文明の特質とユーラシアの海, 陸における交流を概観させる。」として近代以前の諸文明が扱われることが明記されている。
- 4) 日本学術会議は、2011年の提言「新しい高校地理・歴史教育の創造—グローバル化に対応した時空間認識の育成—」(日本学術会議 2011)をはじめ、提言「再び高校歴史教育のあり方について」(日本学術会議 2014)、提言「『歴史総合』に期待されるもの」(日本学術会議 2016)で歴史総合

につながる科目の在り方を検討し、「近代以前」を含んだ形で提言を出していた。

- 5) 独立行政法人大学入試共通センターが発表している「受験者数・平均点の推移(本試験) 大学入学共通テスト」を参照した。令和4年度に比べて令和5年度の入試は全体の受験者数が約18,000人減少した中で、日本史Bの受験者数は約10,000人、世界史Bは約5,000人、地理Bは約2,000人の減少となっている。
- 6) 高大連携歴史教育研究会が2017年10月30日付で作成して公開した(高大連携歴史教育研究会 2017)。同時にアンケートを実施し、アンケート結果は同研究会のWEBサイトにおいて公開されている(高大連携歴史教育研究会 2018)。
- 7) 「(1) 内容の全体にわたって、次の事項に配慮するものとする。」として挙げられた項目「ウ」に「年表や地図, その他の資料を積極的に活用し, 文化遺産, 博物館やその他の資料館などの施設を調査・見学するなど, 具体的に学ぶよう指導を工夫すること。その際, 歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付くようにすること。また, 科目の内容に関係する専門家や関係諸機関などとの円滑な連携・協働を図り, 社会との関わりを意識した指導を工夫すること。」と記されている。
- 8) 学習指導要領の解説においては「改訂の趣旨や要点」を説明した「(4) 学習指導の改善・充実等」の「オ 資料を活用し, 歴史の学び方を習得する学習」で、歴史総合、世界史探究の授業における資料の扱いの重要性が強調されている(文部科学省 2018b: 23, 27)。
- 9) ファイナンス製品をつくる授業においては研究課題名「古代の技術によるモノづくりを通して思考力を育成する教材の開発」で科学研究費奨励研究(課題番号15H00134)の助成を受けて実施した。「海洋国家としてのエジプト」をテーマとした授業は「高校世界史B『古代オリエント世界』を海から考える～古代エジプトの歴史を中心に～」を研究課題として笹川平和財団「海洋教育パイオニアスクールプログラム」助成金事業から助成を受けた。コム・アル＝ディバーウ遺跡を軸とした教材開発は遺跡の調査を率いる隊長の長谷川奏会員(早稲田大学客員教授)の多方面での協力を得て実施をした。実施に際しては、研究課題「大学の教育研究資源を用いた高校世界史の教材開発」で科学研究費奨励研究(課題番号19H00065)の助成を受けて行った。
- 10) 教材開発を進めるため、高大連携歴史教育研究会が教員間で授業教材等を共有できる「教材共有サイト2.0」を立ち上げている。現在のところ、歴史総合が中心であり、世界史探究についてはまだ進んでいるとは言えない。また、会員限定となっているため、誰もが自由に利用できるものではない。
- 11) 東南アジア学会のWEBサイトにおいて、「出版物」内の「教育・社会連携」に「『歴史総合』東南アジア関連索引語参考文献」があり、「人物」と「事項」の2種類がPDFの形で掲載されている。
- 12) 例えば、世界史の教科書記述に関する立教大学でのシンポジウムをもとにした論考「高校世界史教科書の古代イスラエル史記述」(長谷川 2018)があげられる。教科書に掲載されている用語の背景が解説されており、教科書を批判的に生徒に検討させることができる。また、山川出版社の『歴史と地理 世界史の研究250』に掲載された「古代エジプト史研究の最前線——ツタンカーメン(トットアンクアメン) 王朝時代の歴史を再構築する」(河合 2017)はアマルナ時代の理解を生徒が深めるために適しており、授業において生徒に資料として提供している。

参考文献

- 秋田 茂・池田明史・伊藤一馬・金子 肇・田中 泉・長谷川 修一・日高智彦・宮城大蔵・八尾隆生・荒井雅子・西裕一郎・林 裕文 2023『高等学校 世界史探究』世探 707 (2022 年文部科学省検定済) 第一学習社。
- 井野瀬久美恵・小川幸司・成田龍一 2023「〈討議〉転換期の歴史教育／歴史教育の転換」『思想』2023 年 4 月号 (No.1188) 8-31 頁。
- 小川幸司 2009「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」『歴史学研究』859 号 191-200 頁。
- 河合 望 2017「古代エジプト史研究の最前線——ツタンカーメン (トウトアンクアメン) 王朝時代の歴史を再構築する」『歴史と地理：世界史の研究 250』2017 年 2 月号 (No.701) 49-52 頁。
- 岸本美緒・鈴木 淳 (編) 2023『歴史総合 近代から現代へ』歴史総 707 (2021 年文部科学省検定済) 山川出版社。
- 木畑洋一・深見純生・松浦義弘・伊藤敏雄・江川ひかり・貴堂嘉之・澤田典子・平野 聡・小澤 実・三ツ井崇・小野寺史郎・清水裕・小澤弘明・長谷川貴彦・五十嵐大介・桂正人・米山宏史・黒河潤二・宮坂武志・川村 宏・株式会社実教出版社 (編著) 2023『世界史探究』世探 702 (2022 年文部科学省検定済) 実教出版社。
- 木村靖二・岸本美緒・小松久男・橋場 弦 (編) 2023『詳説世界史』世探 704 (2022 年文部科学省検定済) 山川出版社。
- 高大連携歴史教育研究会 2017「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案 (第一次)」https://kodairekikyo.org/wp-content/uploads/2020/08/selection_plan_2017.pdf. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 高大連携歴史教育研究会 2018「高等学校歴史教科書・大学入試出題用語精選基準に関するアンケート集計結果について」https://kodairekikyo.org/wp-content/uploads/2020/08/questionnaire_results.pdf. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 高大連携歴史教育研究会「教材共有サイト 2.0」<https://kodai-kyozai2.org/> (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 近藤和彦・岸本美緒・中野隆生・林佳世子・佐藤次高・鳥越泰彦・株式会社山川出版社 2021『現代の世界史 改訂版』世 A 315 (2016 年文部科学省検定済) 山川出版社。
- 全国歴史教育研究協議会 (編) 2018『世界史用語集 改訂版』山川出版社。
- 東南アジア学会 2023a「『歴史総合』東南アジア関連索引語参考文献 202303_人物」<https://www.jsseas.org/wp-content/uploads/2023/03/a97e2b24a271ed7df33d6374f8c580ea.pdf>. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 東南アジア学会 2023b「『歴史総合』東南アジア関連索引語参考文献 202303_事項」<https://www.jsseas.org/wp-content/uploads/2023/03/4396346c44b0a05fe2b1350a1741faf3.pdf>. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 独立行政法人大学入試センター「受験者数・平均点の推移 (本試験) 大学入学共通テスト」https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/suii/R3_.html. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 日本学術会議 2011「提言 新しい高校地理・歴史教育の創造——グローバル化に対応した時空間認識の育成——」<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t130-2.pdf>. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 日本学術会議 2014「提言 再び高校歴史教育のあり方について」<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-4.pdf>. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 日本学術会議 2016「提言『歴史総合』に期待されるもの」<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf>. (2023 年 12 月 18 日閲覧)
- 日本西アジア考古学会 2023『第 30 回西アジア発掘調査報告会報告集：令和 4 年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会。
- 橋場 弦・桜井英治 (編) 2022『中学歴史 日本と世界』歴史 708 (2020 年文部科学省検定済) 山川出版社。
- 長谷川修一 2018「高校世界史教科書の古代イスラエル史記述」長谷川修一・小澤 実 (編著)『歴史学者と読む高校世界史 教科書記述の舞台裏』3-23 頁 勁草書房。
- 福井憲彦・秋葉 淳・太田信宏・加藤 玄・川島 真・工藤晶人・高野太輔・佐川英治・田中 創・西山暁義・藤崎衛・土屋斎嘉・角田展子・山本勝治 (編) 2023『世界史探究』世探 701 (2022 年文部科学省検定済) 東京書籍。
- 南澤武蔵 2016「授業教材としてのフィアンスーその特徴と作り方」『東大附属論集』第 59 号 62-69 頁。
- 南澤武蔵 2019『高校世界史 B「古代オリエント世界」を海から考える——古代エジプトの歴史を中心に——』2018 年度海洋教育パイオニアスクールプログラム (単元開発部門) 実施報告書。
- 南澤武蔵 2020「エジプト西方デルタを教材とした授業づくり——高大連携の可能性を広げる模索——」『東大附属論集』第 63 号 69-79 頁。
- 三宅 裕 2023「第 30 回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって」日本西アジア考古学会 (編)『第 30 回西アジア発掘調査報告会報告集：令和 4 年度考古学が語る古代オリエント』2-3 頁 日本西アジア考古学会。
- 桃木至朗・杉本淑彦・指 昭博・青野公彦・三田昌彦・清水和裕・吉澤誠一郎・山下範久・杉山清彦・末近浩太・青木一真・大橋康一・加藤健司・川島啓一・後藤誠司・野々山新・美那川雄一・株式会社帝国書院 2023『新詳世界史探究』世探 703 (2022 年文部科学省検定済) 帝国書院。
- 文部科学省 2009a『高等学校学習指導要領』文部科学省。
- 文部科学省 2009b『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』文部科学省。
- 文部科学省 2018a『高等学校学習指導要領』文部科学省。
- 文部科学省 2018b『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』文部科学省。
- 矢部正明 2018「高等学校の現場から見た世界史教科書——教科書採択の実態」長谷川修一・小澤 実 (編著)『歴史学者と読む高校世界史 教科書記述の舞台裏』237-253 頁 勁草書房。
- 吉嶺茂樹 2019「高校教員の目から見た世界史探究」『歴史評論』2019 年 4 月号 (No.828) 68-74 頁。
- 米山宏史 2022「『歴史総合』で歴史認識を育むために」『教育』2022 年 10 月号 (No.921) 80-87 頁。